

渡邊貞乗さんの死を悼んで

〜會津八一の養女・きい子の

枕経を読んだ尼僧〜

中条會津八一會 会長

高橋与兵衛

去る四月三日、朝食中に事務局長の中野氏から興奮気味の声で、「柴橋の庵主様が亡くなりました」「ん?」「はい! 渡邊貞乗さんです」これが第一報でした。貞乗さんは胎内市の広嚴寺を本寺とする同市の柴橋庵の尼僧です。大正十二年生まれですから、九十二歳のご生涯でした。

庵主様(敢えて親しみを込めて、以下こう呼ばせて頂きます)について語るとすれば、特徴的なことはその読経にすべてが込められていると思います。その声には中条弁の口調ながら、言葉尻の明確さは僧侶の声の中にあっても、女性らしい響きと張りがありました。まさに娑婆に響き渡り、すべてを鎮め、安らぎを覚えさせる力を感じさせてくれましたし、亡くなった人の人柄や思い出が蘇ってくる思いがします。また誰にも同じように穏やかに接してくれました。

さて、私がとりわけ印象深く忘れぬ思い出となりましたのは、

十五年前の平成十一年十一月に、會津八一先生の養女きい子さんが亡くなられた当時の取材に訪問した時のことであります。庵主様は庫裡の囲炉裏端にキチンと座って待つておられました。そして、概ね次のようなお話をして下さいました。昭和二十年七月十日のこの日、會津先生の疎開先の丹呉家の菩提寺は近くの太總寺でしたが、住職が応召され、留守だったので、代わって私がその大役を仰せつかったのです。「あの先生はとても偉い人だから、気を付けて行つて来なさい」と言われました。「どんな人だろう、おら、偉い人なんて言われても学校の先生か警察の人しか知らねえ」と答えました。翌日早朝に、観音堂の庫裡に入ると、先生は一人できい子さんの横たわる布団の向こう側に、こちらを向き、胡座をかいいて頭を垂れ、身を震わせて泣いていました。当時私は二十一歳、小柄で小娘のような私の前では、声を出して泣けなかったのでしょうか。じつと堪えているのがわかりました。

その光景をみていて、どうしてこの人が偉いのか分からなかったが、いきなり、「修証義を頼む」と言われ、修証義を知つておられるとは、この時初めて偉大さに気づきました。きい子さんの枕元には小机に蠟燭、線香が灯り、外は雨がしとしとと降つていたので覚えています。

今考えますと、終戦前の食料も薬も何もない時代に、肺結核のきい子さんの看病をした。こんな會津先生の学者魂のなす風貌が、具体的に言葉になったり、所作に現れる処を逃すことなく乙女心に感じ取り、これが何時しか庵主様の読経するその心、声、姿になったものと受け取ることが出来ます。

私たち、中条會津八一會は来年七月十日(きい子命日)に向けて、庵主様の住職された柴橋庵に、會津八一の歌碑を建立するための準備を進めています。完成を楽しみしていた庵主様とご一緒に除幕式ができないのが本当に残念です。心からご冥福をお祈り申し上げます。

* 当寺檀家の小舟戸高橋雅男氏の寄稿です。「秋艸会報」より転載しました。紙面の都合上一部省略。

●写経(般若心経)を始めませんか!

期日 毎月第2日曜日(1月2月はお休み)

時間 午後1時~随時(午後4時終了)

参加予約不要 イス席 筆ペンも可

参加費 納経料300円

* 筆、硯、墨等の準備はありますが、使い慣れたものを持参していただいても結構です。

* 写経台紙(手本)、写経用紙はこちらでご用意いたします。

* 時間内のいつでも写経できます。(1時間位)

9/14 (日)、10/12 (日)、11/9 (日)、12/14 (日)

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色無聲香味觸法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無

写経会 毎月(1月2月を除く)第2日曜 時間午後1時~随時(16時終了)都合付く時間にできます。